# 救急医学は時間との闘い…。ボーダレスに専門の医師たちを束ねて、最大限に生かすことのできるリーダーが求められている。

「救急医学には専門性などない…」「うちの科に入局してから救急にローテイトさせてあげるよ…」「あんなものは専門の片手間にできるよ…」などという発言を、私が救急医学講座に入局した1985年頃によく聞いたものです。しかし、10年前からそのような発言はほとんど聞かれなくなりました。何故なら、それは救急専門医がいるいないによって、その病院における救急患者のみならず重症患者の運命が大きく変わってしまうことが明確になったからです。例えば、各科の優秀な医師が5人いたとしても、それだけでは重症救急患者を救命できるわけではありません。救急医学の専門性は臓器別診療体系とは明確に一線を画しており、一つの臓器をコントロールすることではなく、一定の時間内にどれだけのことを行い、救命し得るかということに専門性を持つというところにあります。

救急医療は主として戦争災害医学から発展してきましたが、逆に救急救命を戦争に例えたとしたら、ほとんどの診療科の治療が局地戦（臓器との戦い）における勝利を目指し、戦争全体（この場合は直接的に生命維持との戦い）の帰趨は、最重要とはならないことになります。一方、救急医学や災害医学は、常に全戦争でどのように戦うかの全体像を考えます。そうすることによって初めて救命が可能となるわけです。つまり生命予後が、明確にその場にいるリーダーの手に委ねられているのです。だからこそ、私たちが育てたいのは、どのような状況におかれてもその場にいる救急集中医療チームの能力を最大限に生かすことのできるリーダー…、つまり救急指導医なのです。

救急・災害医学分野は岐阜大学に生まれてまだ3年ですが、入局したらどうなるのか…不安な方も大勢いらっしゃると思います。実は20年前に私が入局した香川医科大学の救急医学講座もまさにその状況でした。有名医局で先輩もいる医局に入れば、何となく先輩の進む通りに進めるかもしれません。しかし自分自身を振り返ると、まだ先輩の少ない医局に入ることはそれだけでも大きなチャンスを得ることになりました。苦労も多いかも知れませんが、その結果として得た物は極めて大きかったと実感しています。皆さんも、日本一を目指して着々と実績を積み、すでに臨床実績でも中部地方有数となっている岐阜大学高度救命救急センターで後期研修を行い、大きな飛躍をしませんか?

チャンスに後ろ髪はありませんよ!

教授 小倉真治

**＜プロフィール＞**

岐阜大学大学院医学系研究科救急・災害医学教授
同大学医学部附属病院高次救命治療センター長

1985年に岐阜大学医学部を卒業。
96年に米国サウスキャロライナ医学大学客員研究員。
翌年、香川医科大学附属病院救急部助教授となり、2003年より現職。
日本救急医学会指導医、認定医。
専門分野：救急医療体制ほか

**★主要スタッフ**

救急指導医3名　救急専門医8名

| | |
|---|---|
| 教授 | 小倉真治 |
| 准教授 | 豊田泉 |
| 講師 | 小塩信介 白井邦博 山田実貴人 |
| 臨床講師 | 金田英巳 村上栄司 吉田省造 吉田隆浩 熊田恵介 |

他16名